大書院跡について

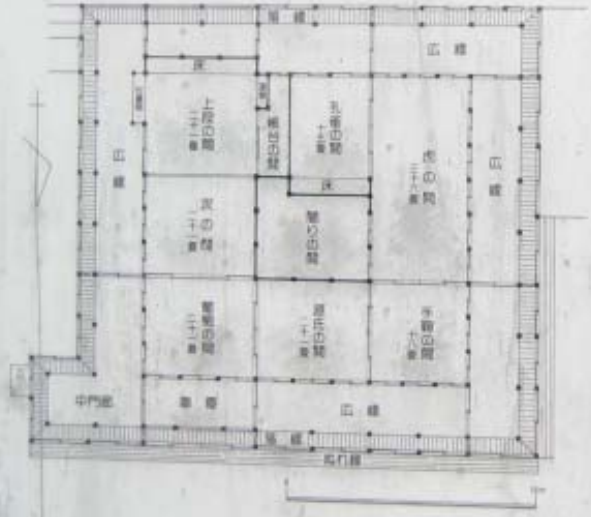
篠山城大書院は二の丸跡に所在した城主居館の中で、とくに歴代藩主による公式行事に使用された場所で、正規の書院造の建物となっていました。

この建物は慶長十四年（一六〇九）の徳川幕府の天下普請による篠山城築城時に、京都二条城の御殿を参考にして建てられたと伝えられ、大きさは東西二十八メートル、南北二十六メートルの篠山城最大の規模となっていました。内部には上段の間、孔雀の間などの多くの部屋があり、障壁画で飾られていたと考えられます。

廃城後もこれだけ残されましたが、昭和十九年の失火により失われました。その後、焼失から五六年たった平成十二年三月大書院の威容が大書院跡地に甦りました。

篠山市教育委員会

昭和18年頃の大書院



大書院内部の部屋割（元禄頃の絵図参考）

篠山城本丸跡

ここは、篠山城の最後の砦となる本丸跡です。築城当初は現在の二の丸が本丸、現在の本丸は南東の隅に、天守台が造られたことから、特に殿守丸と呼ばれていました。

天守台の大きさは東西約十九メートル、南北約二〇メートル、約三八〇㎡の広さがあります。天守台石垣は本丸内側からの高さ、約四メートル、外側の南と東側犬走りからの高さ約十七メートルで、篠山城で最も高い石垣です。

天守閣は築城の時に建築が中止され、代わって天守台南東隅に二間四方（四メートル四方）の一重の隅櫓が建てられました。

本丸の周囲は天守台と南西隅・北西隅・北東隅の三ヶ所に二重の隅櫓を建て、間を多聞櫓でつないで内部を囲んでいました。二の丸には大書院をはじめとする御殿が建てられたのに対して、本丸には御殿等の建物は無かったようです。

本丸内の北側中央にある一の井戸は岩盤を掘り抜いたもので、深さ約十六メートル（内水深八メートル）で、掘るのに二年もかかったと伝えられています。

篠山市教育委員会

教育の礎を築いた
青山忠誠 公の偉業について
― 雅号は環峰 ―

学舎を創設

明治九年郷土に教育の息吹

青山家二十一代青山忠誠公は、篠山に人材を育てる学校がなければならないと考え慶応義塾の創立者福澤諭吉氏にはかったところ、福澤氏は、極めて秀れたことであると賞賛、弟子である二人の教師（英語、物理化学）を篠山に送ってきました。

かねて廃藩後間もなく藩士の有志が、春日神社の境内の小桃源に子弟教育のためにつくった「共茂舎」を明治九年十二月二十八日に「私立篠山中年学舎」と改めて、とり敢えず子弟を集めて、漢文 数学、英語の教授を開始しました。忠誠公は "旧藩領に永遠に残す置土産は、子弟を教育することである" と私財を投じて学舎を建設しました。

教育に名言

忠誠公熱情こめて教育を振興

学舎が変災に遭ったときに忠誠公は、

"学舎は焼くとも教育焼くな"

との名言の意志のもとに、直ちに巨費を投じて、学舎を再建いたしました。まことに藩民に対する温情は、熱意のこもったものでした。

明治十一年には「公立篠山中学」に改め、同十八年にはこれを廃校して「私立鳳鳴義塾」を創設して多くの人材を育てました。また東京への進学の子弟のため寄宿舎を設けて「尚志館」を開きました。このように忠誠公は偉大なる育才事業をなし遂げたのです。

今日郷土篠山市には、この伝統の教育精神が脈々として流れ、県立高等学校を始め郷土は教育の市として、伝統の歴史と共に盛り上っています。

忠誠公は明治二十年（一八八七）七月廿三日逝去（享年二十九才）

明治二十五年十一月七日、正四位子爵を追贈表彰されました。

追慕碑

この大きな追慕碑は、昭和十一年七月に、忠誠公の遺徳と数々の功績を追慕して建立した碑です。

青山神社

学問と教育の神さま
青山神社のいわれ

篠山城主であった青山家ゆかりの、ここ篠山城跡本丸に、明治十五年五月青山神社を創建して、青山家十代の名君青山忠俊公を祭神とし、青山家の御霊をお祀りいたしました。大正五年四月には、社殿を改築して規模も大きくなりました。

さらに昭和五年には、篠山城主であった十八代の名君青山忠裕公を合祀し、学問と教育の神様として、偉大なる人格が敬慕されてきました。このことについて要点は次の通りです。

祭神

青山忠俊　"きびしく家光をいさめる"

忠俊は元和二年（一六一六）に、家康の孫に当る竹千代（後の三代将軍家光）の幼時の輔導役（養育係）となって「勇をもって守り育てるように」と命ぜられました。強い心の手ごわい忠俊は、心をつくして竹千代をきびしくいさめ育てました。後に将軍となった家光が、幕府を確かにかため治めることができたのは、忠俊の功績も大きかったことを物語っています。

忠俊は、寛永二十年四月十五日（一六四三）逝去（享年六十六才）

祭神

青山忠裕　"善政をしいた城主・学問をすすめる"

忠裕は、教育によって人物を育てようと、篠山藩校「振徳堂」の学舎をふやし充実して、読書・習字・算術・習礼の教科を学習させました。さらに藩校の玄関には「石敢當」と云う魔除の石柱を建て、教室の中へ魔が入ってこないように護りました。これ程に学習の場を大切に護ったのは、全国的に珍しいことです。

忠裕は篠山城主として、温情の英主と仰がれ、幕府の要職にも就任し中でも老中を三十二年間も勤続して、その功績が認められ、篠山藩は一萬石加増され六萬石となりました。忠裕は、天保七年三月廿日（一八三六）逝去（享年六十九才）

祭礼

青山神社の例祭は、明治以来の日を変更して平成十五年より毎年四月の第一土曜日（宵宮）と日曜日（本宮）の両日行うことに定めました。本宮は、春日神社へ渡御の行列があって、御輿と共に、鎧と薙刀等で扮した小学生達が太鼓とほら貝の合図で町内をねり歩き、昔を偲ぶ祭礼が催されます。

青山神社

青山忠誠公頌徳碑（青山忠誠公略伝）
安政六年二月十五日篠山藩主青山忠良の子として江戸（現東京）に生れた。明治八年篠藩子弟を東京に招き学資を給して進学させ邸内に寄宿舎を設け尚志館のもとを開いた。明治九年篠山に篠山中学舎を設け人材の養成につとめ鳳鳴義塾（現篠山鳳鳴高校）の基礎を築いた。明治二十年七月二十三日東京で病没（享年二十九才）明治二十五年正四位を追贈された。
青山神社